

2017年9月21日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 「苦」について

### 1. 概要

#### (1) 資料

増谷文雄著『阿含経典2』ちくま学芸文庫／人間の感官（六処）に関する経典群／閻浮車相應／4 何ありて、12 苦

#### (2) 主題

人間の苦について学びたいと思います。

また、苦を知り尽くすことについて学びたいと思います。

### 2. ジャンプカードカ

#### (1) 経文「何ありて」

かようにわたしは聞いた。

ある時、長老サーリプッタ（舍利弗）は、マガダ（摩揭陀）の国のナーラカ（那羅迦）という村に住していた。

その時、ジャンプカードカ（閻浮車）なる遊行者が、長老サーリプッタを訪ねてきて、たがいに会釈をかわし、親愛にみちた懇懃なる談話をまじえて、やがてその傍らに坐した。（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 111）

#### (2) ジャンプカードカ

前々回、閻浮車相應／13 己身を学んだときに見たとおり、ジャンプカードカは、サーリプッタの同郷の友人です。

### 3. 修行の目的を訊ねる

#### (1) 経文「何ありて」

傍らに坐したジャンプカードカは、長老サーリプッタにいった。

「友サーリプッタよ、あなたは何の利ありてか、沙門ゴータマ（瞿曇）について修行するのであるか」（同書、p. 111）

#### (2) 沙門ゴータマ

「沙門」とは、インドにおける出家者の総称。ゴータマは、釈迦牟尼世尊の姓。「沙門ゴータマ」とは、「ゴータマを姓とする一族から出た出家修行者」という意味になります。

なお、釈迦牟尼世尊は、南方仏教では、一般に「ゴータマ・ブツダ」と呼ばれるそうです。これは「ゴータマを姓とする一族から出た覚者」という意味です。

(3) 何故、釈迦牟尼世尊のもとで修行するのか

ジャンプカードカは、サーリプッタに、どのような利があるから、釈迦牟尼世尊のもとで修行するのかと訊ねました。修行の目的を訊ねたわけです。

4. 苦を知りつくすために修行する

(1) 経文「何ありて」

「友よ、わたしは、苦を知悉せんがために、世尊について修行するのである」（同書、p.111）

(2) 苦を知りつくすために修行する

サーリプッタは、苦を知りつくすために、釈迦牟尼世尊について修行すると答えました。

(3) 苦しみを正しく消滅する

サーリプッタとモッガラーナが、釈迦牟尼世尊のもとへおもむき、弟子入りを願ったとき、釈迦牟尼世尊は、次のような言葉で受け入れたと、伝えられています。

「来たれ、修行僧らよ、教えはよく説かれた。正しく苦しみを消滅するために修行を行なえ。」（中村 元選集／第11巻『ゴータマ・ブッダ』春秋社、p343）

5. 苦を知りつくす道

(1) 経文「何ありて」

「では、友よ、その苦を知悉する道があるであろうか。そこにいたる方法があるであろうか」

「友よ、その苦を知悉するには道がある。そこにいたる方法があるのである」

「では、友よ、その苦を知悉する道とはなにか。そこにいたる方法とはなんでであろうか」

「友よ、かの聖なる八支の道こそは、その苦を知悉する道である。それは、すなわち、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定である。友よ、これがその苦を知悉する道であり、そこにいたる方法なのである」

「友よ、その苦を知悉する道は、まことに善い。そこにいたる方法は、まことに素晴らしい。友サーリプッタよ、それはまた勤めはげむに足る」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.111~112）

(2) 苦を知りつくす道があるか

ジャンプカードカが重ねて、苦を知りつくす道があるかと問いますと、サーリプッタは八正道がその道であると答えました。この答えを聞いたジャンプカードカは、心から感動したのです。以上で「何ありて」と題する経文は終わります。

## 6. 苦とは何か

### (1) 経文「苦」

かようにわたしは聞いた。

ある時、長老サーリプッタ（舍利弗）は、マガダ（摩揭陀）の国のナーラカ（那羅迦）という村にとどまっていた。

その時、ジャンプカーダカ（閻浮車）なる遊行者が、長老サーリプッタを訪れきたって、たがいに会釈をかわし、親愛にみちた慰懃（いんぎん）なる談話をまじえて、やがてその傍らに坐した。

傍らに坐したジャンプカーダカは、長老サーリプッタに問うていった。

「友サーリプッタよ。苦、苦と称せられるが。友よ、いったい、苦とはなんであろうか」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.125）

### (2) ジャンプカーダカの問い

遊行者ジャンプカーダカ（閻浮車）が、サーリプッタに、「苦とはなんであろうか」と問いかけています。

おそらく、ジャンプカーダカは、当時の宗教指導者や哲学者に、苦について訊ねて歩いたのでありましょう。しかし、誰からも納得のいく答えを聞くことができなかったであろうと思います。

## 7. 苦苦性・行苦性・壊苦性

### (1) 経文「苦」

「友よ、これらの三つが苦である。すなわち、苦苦性（くくしょう）・行苦性（ぎょうくしょう）・壊苦性（えくしょう）である。友よ、これらの三つが苦である」（同書、p.125）

### (2) 三苦

#### ① 三苦

サーリプッタは、苦は、苦苦性・行苦性・壊苦性であると答えました。これを三苦と言います。三苦は、誰もが、現実を経験する苦しみであるといえます。

#### ② 苦苦性

苦苦性は肉体的な苦です。

打たれる、切られる、冷水や熱水に触れるなどの痛撃を受けたときに感じる苦です。

苦苦性は、修行している人もしていない人も、悟った人も悟っていない人も、同じように感じる苦です。これらの痛撃を感じる神経を持つものであれば同じように感じる苦ですから、客観的な苦であると言われます。

### ③ 行苦性

「行」には「移り変わるものごと」という意味があります。ものごとが変化するときを感じる苦が行苦です。

ものごとが自分の都合に合わない変化をするときに感じる苦、自分の希望に合わない変化をするときに感じる苦が、行苦です。

その意味では、次の壊苦も行苦の一つと言えます。

### ④ 壊苦性

壊れて欲しくないものが壊れるとき、衰えて欲しくないものが衰えるとき、亡びて欲しくないものが亡びるときを感じる苦が、壊苦です。

### ⑤ 精神的苦悩

苦苦性が肉体的苦痛であるのに対して、行苦性・壊苦性は精神的苦悩です。

行苦性・壊苦性は、悟っていない人に生じる苦です。悟った人は、「ものごとの移り変わりにとらわれて、苦しみを生じる」というようなことはありません。

## 8. さまざまな苦

### (1) 四苦

仏教では「生老病死」を四苦と言います。

これは、「生老病死は苦である」ということではありません。「生老病死を苦と受け取っている」ということです。これは行苦・壊苦であり、精神的な苦痛です。

### (2) 八苦

生老病死の四苦に、愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦の四つの苦を加えて八苦と言います。これも行苦・壊苦であり、精神的な苦痛です。

愛する者との別れ（愛別離）を苦しみます。

怨み憎む者との対面（怨憎会）を苦しみます。

求めるものを得られないこと（求不得）を苦しみます。

肉体と精神（五陰）が活発に活動（盛）すると苦悩が生じます。

### (3) その他の苦

この他にも、肉体的な苦、経済的な苦、人間関係の苦、社会的な苦、人生上の苦など、実にさまざまな行苦・壊苦があります。

## 9. 苦を知りつくす道があるか

## (1) 経文「苦」

「では、友よ、それらの苦を知りつくす道があるであろうか。そこにいたる方法があるであろうか」(同書、p. 126)

## (2) 苦を知りつくす道があるか

苦とは、苦苦・行苦・壊苦であることを聞いたジャンプカーダカは、それらの苦を知りつくす道があるかと重ねて問います。

苦苦・行苦・壊苦とは理論であって、現実の苦を知りつくすことが必要です。そうでなければ、現実の苦に対処することができません。

## 10. 苦を知りつくす道はある

## (1) 経文「苦」

「友よ、それらの苦を知りつくすには道がある。そこにいたるべき方法があるのである」

「では、友よ。それらの苦を知りつくす道とはなんであろうか。そこにいたる方法とはなんであろうか」

「友よ、かの聖なる八支の道こそは、それらの苦を知りつくす道である。それは、すなわち、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定である。友よ、これがそれらの苦を知りつくす道であり、そこにいたるべき方法なのである」

「友よ、この苦を知りつくす道は、まことに善い。そこにいたる方法は、まことに素晴らしい。友サーリプッタよ、それはまた勤めはげむに足る」(同書、p. 126)

## (2) 聖なる八支の道

サーリプッタは、「苦を知りつくす道」は「聖なる八支の道」であると答えます。聖なる八支の道を実践すれば、苦を知りつくすことができるということです。

## (3) 迷いを去る

苦が明らかにならないのは、迷いのなかにあるために、智慧が働かないからです。迷いを去れば、智慧が働き始め、苦を知りつくすことができます。

聖なる八支の道を学び実践すれば、迷いが去り、智慧が働き、苦しみを知りつくすことができるようになります。

## (4) ジャンプカーダカの讃嘆

サーリプッタの答えを聞いてジャンプカーダカは喜び、讃え、その道は努力する価値があるとうなずきました。苦を知りつくし、苦から脱する道が見えたので、ジャンプカーダカは心から喜んだのでありましょう。

## 1 1. 正見

### (1) 正見

聖なる八支の道の「正見」について、「分別」と題する経文は、次のように述べています。

「比丘たちよ、いかなるをか正見というのであろうか。比丘たちよ、苦なるものを知ること、苦の生起を知ること、苦を滅することを知ること、苦の滅尽にいたる道を知ることがそれである。比丘たちよ、これを名づけて正見というのである」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.173）

すなわち、正見とは、四つの聖諦でものごとを観察し、修行の道を見出すことであると言っているわけです。

### (2) 苦を知りつくす

釈迦牟尼世尊が「苦を知りつくす」というときは、四つの聖諦で苦に対処することを意味しているのでありましょう。

## 1 2. 凡夫においては、苦が苦を生む

### (1) 経文「箭（や）によりて」の一節

「比丘たちよ、まだわたし（釈迦牟尼世尊）の教えを聞かない凡夫は、苦なる受に触れられると、泣き、悲しみ、声を上げて叫び、胸を打ち、心狂乱するにいたる。けだし、彼は二重の（苦なる）受を感ずるのである。すなわち、身における（苦なる）受と、心における（苦なる）受とである」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.098／人間の感官（六処）に関する経典群／受相応／箭によりて）

### (2) 苦の連鎖

釈迦牟尼世尊の教えを聞かない人々が肉体的苦痛（苦苦）を受けると、精神的苦悩（行苦・壊苦）を生じることが述べられています。

## 1 3. 聖なる弟子においては、肉体的苦痛のみで終わる

### (1) 経文「箭（や）によりて」の一節

「しかるに、比丘たちよ、すでにわたしの教えを聞いた聖なる弟子は、苦なる受に触れられても、泣かず、悲しまず、声をあげて叫ばず、胸を打たず、心狂乱するにいたらない。けだし、彼はただひとつの（苦なる）受を感ずるのみである。すなわち、それは、身における（苦なる）受であって、心における（苦なる）受ではないのである」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.099）

### (2) 肉体的苦痛のみ

この経文では、釈迦牟尼世尊の教えを聞いた聖なる弟子は、肉体的苦痛（苦苦）は受けても、それによって精神的苦悩（行苦・壊苦）が生じることがないと言っています。

#### 1.4. 苦を以て苦を捨てんと欲す

妙法蓮華経方便品に「苦を以て苦を捨てんと欲す」（『訓訳妙法蓮華経#開結』平樂寺書店版、佼成出版社発行、p.78）とあります。これについて、庭野日敬師は、次のように解説しています。

##### (1) 苦の悪循環

「〈苦を以て苦を捨てんと欲す〉……じつにいいことばです。凡夫というものは、現象としてあらわれる苦しみを、やはり現象としてあらわれる何物かで消そうとするのです。たとえば、失意や貧乏の苦しみを酒に浸ることによってわすれようとし、しかし、一時的にはわすれることができても、酔いがさめれば元の木阿弥です。いや、かえって心の苦しみは重くなり、そのうえ健康をも損ない、経済的にも貧乏の上ぬりをするようになります。

（中略）

このようにして、現象としてあらわれる苦しみを、現象としてあらわれる何物かによって解決しようとしても、結局においてそれは新しい苦を生じるばかりであって、いつまでもその悪循環はおしまいにならないというのが、〈苦を以て苦を捨てんと欲す〉の意味です」（庭野日敬著『新釈法華三部経2』佼成出版社、p.368-369）

##### (2) 苦を捨てる道

「ほんとうに苦をすてようとするならば、心のもちかたをかえることです。〈四諦〉の教えによって、苦の実態を直視し、苦の原因をつきとめることです。そして、正しいもののみかた・正しいものの考え方などの〈八正道〉を实践すれば、苦のほうでいつしか消滅してしまうものであります」（同書、p.369）